

# 《砧》試解

——法華読誦の力にて——

飯塚 恵理人

## 一 はじめに

《砧》において、研究者の間で議論されている問題に、夫と侍女の夕霧の性格が世阿弥時代どのようなものであったのかという問題がある。この問題は、この夫婦の関係を理解する上で重要な鍵である。また、この《砧》の末尾は「法華読誦の力にて、幽霊まきに成仏す。」である。妻が死後も地獄に堕ちて夫を恨んでいたのに、夫の弔いによって成仏することが、物語にとってどのような意味があるかも大きな問題となるだろう。そして、この妻の成仏で終わる物語が、説話の流れの中でどのように位置づけられるのかも、検討すべき課題だろう。

本稿では、《砧》の詞章は特に断らない限り、『謡曲集 上』<sup>(注1)</sup>（日本古典文学大系 岩波書店）に校訂された堀池識語本を用いる。引用頁は特に示さない。

《砧》試解  
《砧》は世阿弥の作であることが確実でありながら、世阿弥時代の本文や演出に關しての資料は全く残されていない。表章氏<sup>(注2)</sup>によれば、《砧》は室町中期には一旦上演が途絶え、再興されたのは元禄頃だった。そして、この能の再

興に関しては、当然再興の際に演出や本文の見直しがなされた。表氏<sup>(注3)</sup>（前掲）は、観世宗家蔵の『謡本書入帖型付』を例証として江戸中期以降の《砧》の演出について、

多くの点で「こうもするがああもする」という形の記事が多く、当時の観世流の演出がまだ流動的であつたことが知られる。そうした流動性はどの能でも細部には残っているのであるが、《砧》の場合は新たに演出を工夫した能だけに、その幅が大きいのであろう。もつとも基本的な演出は今と大差ないようで、文句に即した型が多すぎるように思われるのも元章時代以来のことらしい。これまた、新たに演じ出した能であるために、江戸期の観世流の傾向が顕著に現れた点なのであろう。

と言われる。現在見られる舞台の印象を、世阿弥にまで遡らせるのは研究上はもとより無理だが、《砧》の上演が一旦途絶えていることは、演出のみならず、その本文や登場人物の人物造形にも解釈の変化が生じている可能性を考えるべきであらう。

《砧》において夫は、妻の怨慕の対象であり、夕霧は、夫が秋の暮れにも戻らないことを妻に告げて妻の死の原因を作ったともに重要な登場人物である。考察に入る前に、夫と夕霧の造型について、従来の研究を確認しておきたい。八寫正治氏<sup>(注4)</sup>は、

在京の間、夫と侍女との間に肉体関係がある事は当然考えられ、暮に帰らぬ事も又、この侍女から知らされる。

近代的な解釈を施せば如何ようにも造形出来る侍女ではあるが、こゝでは単なる傀儡としてしか使われて居らず、こゝに時代の限界を感じさせる。それと共に、ワキもツレも善意ある人物としてのみ処理されて居り、世阿弥の目的が、シテの閨怨の表現以外になかった事を示して居る。

と、夕霧を夫の愛妾である可能性を認めつつも、夫・夕霧ともに「善意ある人物」であるとする。堂本正樹氏<sup>(注5)</sup>は、夕

霧について、

夕霧という女は、当時の習慣では夫の都にいる間の性的パートナーアでしょう。身分は召し使いとはいえ、本妻から見ればライバルでもありました。

と、八瀧氏と同じく夕霧を愛妾と考えておられる。また、堂本氏<sup>(注6)</sup>は、妻の死に関連する部分で、

ここで折り悪しくも、「今年の暮れにも戻れない」という、都からの便りがもたらされます。夫に取っておそらく、是非ない訴訟の展開だったのでしょう。しかし妻の感情は、現実を冷静には理解出来ません。「さてははや、真に変はり果て給ふぞや」とこの結果を、男女関係のそれとしか理解しようとしません。病に臥しての彼女の死。夫は驚いて帰郷します。この訴訟一件を捨てての帰国に、夫芦屋の某の妻に対する真心は疑えません。

と、夫については、妻に対する真心のある人物と捉えている。この点で、堂本氏は八瀧氏と共通する。

田口和夫氏<sup>(注7)</sup>は、夕霧を夫の愛妾とする八瀧説を受けつつも、夕霧が「善意ある人物」と言えないと言われる。田口氏は、夕霧が妻に夫が帰ってこないと告げる部分の、室町末期の伝本の本文異同に注目される。この部分を引用すると、

《砧》の前場、砧の段が終つて、ワキが帰郷せぬ事の告知からシテの死に至る「時間」については、さまざまな解釈がある。現行各流の詞章のように、ツレ夕霧が「いかに申し候、都より人の参りて候が、この年の暮にも御下りあるまじきにて候」(観世流)と云うならば、次のシテの嘆き「せめては年の暮をこそ、偽りながら待ちつるに」ときつちりと対応して問題はないのだが、岩波古典大系の底本のような室町時代末の古写台本によると、ういう対応が成り立たないのである。室町末期筆長頼本・下間少進旧蔵車屋本なども同じだが、それらの本では、夕霧は「いかに申し候、殿はこの秋もおん下りあるまじきにて候」とだけシテに伝えるのである。夕霧がワキに

命じられたのは「この年の暮には必ず下る」ことを伝える事だった。命じられた事と異なる表現で伝えたことになる。矛盾のようだが、これが古型なのである。現行詞章は、これを合理化するために〈砧〉の再興上演後に工夫されたものである。

となる。田口氏の指摘は、夫が妻に伝えるように述べた事を、夕霧が表現を変えて述べているという点であった。田口氏は、この理由を

夫は予定通り三年目の年の暮に帰って来たと考えてよいだろう。妻を悲劇の死に追いやったのは従って、夕霧の「この秋もおん下りあるまじき」という言葉であった。これはその限りではワキの命令に背いてはいない。年の暮に必ず下るということは、秋には下れぬという実態を含むからである。しかしこれを聞いた妻は、秋に下らぬこと即ち年の暮にも下らぬと解し、絶望したのである。おそらくワキの愛妾であった夕霧の、これはささやかな作為であったと考えたい。

と「夕霧の作為」と考えておられる。

一方西村聡氏は、砧を打った後に都から夕霧に続く第二の使者が来て、夫が秋の暮れに戻れないと告げたのか、それとも夕霧以外の使者はなく、夕霧自身の判断で夫が秋の暮れにも下ることが出来ないかと告げたのかについて、

堀池本等の古形に従う限り、第二の使者は存在せず、夕霧は妻の砧打ちの後で初めて、つまり夕霧が帰国したその夜の内に、しかも主命を違えて、芦屋の某は今年の暮れに帰るのではなく、この秋も帰れそうにないと伝えた。夕霧の帰国の現在は「秋の暮れ」（3段「下ゲ哥」）であるから、確かに芦屋の某が秋の内に帰国することは、夕霧の後を追う急ぎ方をしないと無理、この秋も帰れないと報じて間違った事実を伝えたわけではない。主命に忠実たろうとするならば、けれども年の暮れには必ずお帰りになります、と付け加えるべきであった。

と、夕霧の判断で秋の暮れには戻ることが出来ないと言われたとされる。この点は西村氏と田口氏で共通している。但し、西村氏は、田口氏と異なり、夫が上京するときに遅くとも三年以内に帰ると言う約束があったと考えておられる。この部分を引用すると、

この秋の暮れに約束の期限を迎え、夫との契りは絶え果てたと妻は感じている。夫は三年以内に帰る、それまでは折々に便りを送ると約して上京したのであろう。

となる。そして、西村氏は、この秋に夫が夕霧をつかわした理由を

夕霧を遣わして伝えるべきことは、正しく夕霧が妻に告げたとおり、この秋も帰れず、約束が果たせないことの断りであった。それを、年の暮れには帰るという表現で、妻を追い詰めず、穏やかな了解が得られるよう、「心得て」伝えよと夕霧に指示した。

と「秋に帰れない」と告げるためであったと言われる。そして、夕霧は、終夜妻と砧を打つ。夕霧が妻に、夫がこの秋の暮れも戻らないと告げた理由を、西村氏は、

砧打つことを共にし、終夜「思ひを述ぶる」妻の傍らにいて、妻の貯えた憂愁には気休めが通じないことを、夕霧は悟った。指示された遠回しの表現は避け、芦屋の某がこの秋も帰れない事実だけを、夕霧は告げた。という。

八島氏・堂本氏・西村氏はともに、夫と夕霧を「善意の人物」と考えておられる。田口氏は夕霧の夫が帰らないと言う言葉に作為を見る。この点で両者には開きがある。

## 二 夫の在京と夕霧

《砧》の脇は在京している夫である。この夫と夕霧の問答は、

これは九州芦屋の某にて候、われ自訴のことあるにより在京仕り候、仮そめに在京と存じ候ひつれども、当年三年になり候、あまりに古里のことも心もとなく候ふほどに、召し使ひ候ふ夕霧と申す女を下さばやと思ひ候いかに夕霧、あまりに古里心もとなく候ふほどに、おことを下し候ふべし、この年の暮れには必ず下るべきよし心得て申し候へ。さらばやがて下り候ふべし、必ずこの年の暮れにはおん下向あらうずるにて候

というものである。この部分では夫の在京の理由は訴訟とされる。ただ、《砧》は夫が京都において妻以外の女性と問答している場面から始まることは重要だろう。これは夫が夕霧に限らず、他の女性に近づくことのできる環境にいることを象徴的に表現する場面と言つて良い。

一方喜多流は、この場面を省略し、冒頭に夕霧が名乗る。これを引用すると、

これは九州芦屋の某殿に仕へ申す、夕霧と申す女にてさむらふ、さても頼み奉り候ふ某殿は、ご訴訟のこと候ひて、三年に余りご在京にて候、わらはもおん供申し都に候ひしが、古里のこと心もとなく思しめし候ふほどに、おん使ひに参れとのおんことにより、只今芦屋の里へと急ぎ候。

となる。喜多流における夕霧の位置は、単なる使者であり、夫の意志を妻に伝達する役割のみであると言える。他流では、妻は夫に他の女性がいると信じており、それをある程度事実として展開するが、喜多流はその意識が薄い。

妻の出は

それ鴛鴦の衾の下には、立ち去る思ひを悲しみ、比目の枕の上には、波を隔つる愁ひあり、ましてや疎き妹背の

中、同じ世をだに忍草、われは忘れぬ音を泣きて、袖に余れる涙の雨の、晴れ間稀なる心かな

というものである。「夫婦は二世」の契りであるということを前提にし、来世までも一緒でありたいにも関わらず、この世の内でも夫の訪れない「忍ぶ」身であることを述べる。この「夫婦」が「二世」の契りであることは、結末部分にも大きく関わるものと考えられる。都から訪れた夕霧に対して、妻は恨み言を言う。この問答を引用すると、

いかに夕霧珍らしながら恨めしや、人こそ変はり果て給ふとも、風の行くへの便りにも、などや音づれなかりけるぞ。さん候ふ疾くにも参りたくはさむらひつれども、おん宮づかひの隙もなく、心よりほかに三年まで、都にこそは候ひしか。

となる。「人こそ変はり果て」と言う言葉は、夫の心が自分になく、他の女性に移っているという意味である。このような形で「変はる」を用いる例としては、《鉄輪<sup>注13</sup>》の

恨めしやおん身と契りしその時は 玉椿の八千代 二葉の松の末かけて 変はらじとこそ思ひしに などしも捨ては果て給ふらん あら恨めしや

という例がある。《鉄輪》でもそうであるが、「変はる」と言った場合、浮気をした夫の方には、すでに妻以外の女性がいると考えるのが自然であろう。先学の指摘の通り、夫と夕霧との間に関係があったと、この作品では確かに読むことが出来る。但し、この場面で妻が夫の浮気相手を夕霧であると考えているということはないであろう。夕霧は「侍女」であり、かりに夫の妾であったとしても、夫にとって主な「妻」にはなり得ない。また、少なくとも現在では故郷に帰ってきているのであり、夫の帰郷をさまたげるものではない。妻は夫を都から離れさせないような、そういう都の妻が夫にしていることを疑っている。

旧知である侍女の夕霧は、三年間夫の側にいた。そして、その間連絡をしなかった。夕霧の「さん候ふ疾くにも参りたくはさむらひつれども、おん宮づかひの隙もなくて、心よりほかに三年まで、都にこそは候ひしか。」という言葉に對して、妻は「なに都住まひを心のほかとや、思ひ遣れげには都の花盛り、慰み多き折々にだに、憂きは心の慣らひぞかし」と反論する。都には、故郷の者の生活を忘れさせるだけの「慰み」があり、妻は夕霧がその都にいて田舎の生活を思いやる事が出来なかつたと考えている。そして、その延長で言えば、妻は、夫もまた、都に惹かれるものがあつて歸つてこないと考えていると読むことが出来る。妻は自分の心情を、

鄙の住まひに秋の暮れ、人目も草も 離れ離れの、契りも絶え果てぬ、なにを頼まん身の行くへ。

三年の秋の夢ならば、三年の秋の夢ならば、憂きもそのまま覚めもせて、思ひ出は身に残り、昔は変はり跡もなし。げにや偽りの、なき世なりせばいかばかり、人の言の葉嬉しからん、おろかの心やな、おろかなりける頼みな。

と述べる。妻の「げにや偽りのなき世なりせばいかばかり」という表現は、夫の「帰る」という言葉もそのままには信じる事が出来ない状態に妻があることを示している。それは「契りも絶え果て」たことによる。この「三年」が夫の「訴訟」のための「三年」であることが、妻の意識にないことは注意する必要があるだろう。

### 三 砧を打つということ

妻は、里人が砧を打つ音を聞いて、蘇武の妻の故事を思い出す。これは、

げにやわが身の憂きままに古言の思ひ出でられて候ふぞや、唐土に蘇武と言つし者、胡国とやらんに捨て置かれ



しに、古里に留め置きし妻や子の、夜寒の寢覺めを思い遣り、高樓に上つて砧を打つ、志しの末通りけるか、萬里のほかなる蘇武が旅寢に、故郷の砧聞こえけり、

というものである。この蘇武の妻説話は、和漢朗詠集の古注釈などに見られることが、既に稲田秀雄・黒田彰・徳江元正・田口和夫の各氏によって指摘されている。この妻の説話は、ここでは「志しの末通りけるか」と、思いが通じた例として挙げられている。蘇武は最後には帰国しているから、この妻は、蘇武の妻のように、自分の思いが相手に届き、夫が帰国する事を望んでいると言つて良い。妻はここで、「わらはも思ひや慰むと、とても淋しき呉織、綾の衣を砧に打ちて、心を慰まばやと思ひ候。」と衣を打つて「心を慰」さもうと言つ。

この砧を打つ行為は、曲の最後の妻の成仏の部分に「これも思へば仮そめに、打ちし砧の声のうち、開くる法の花心、菩提の種となりけり」とある部分に対応する。この砧の段に妻が「開くる法の花心」を持つ部分があるのだが、これについて、相良亨氏は、

『砧』は、(中略)怨慕の情を追求したものではなく、より正確には、砧を打つて怨慕の情を慰めようとした女の心を謡つたものというべきであろう。地獄の責めをうけても消えない怨慕の情のはげしさも謡われるが、慰めようとしても容易に慰めきれないはげしさとして位置づけられているというべきであろう。「慰まばや」という心は、大きな屈折はあるが、結局はそれが「菩提の種」となり、彼女を「成仏の道」につなげる核になっていると思われる。

と砧を打つて「心を慰めようとした」点に求められる。西村氏は、

砧の段は、夫が帰ると聞いて、年の暮れまでをどう待つか、夕霧帰国後の進行を追う(これが通説)のではなく、夫の帰国はまだ知らされず、帰らぬ夫を待ったこれまでの心の軌跡を、この夜一氣にたどり返して、砧打つ現在

を過去の「心象風景」に重ねながら、言葉にとらえ切った段と考えられる。そこにいくらか解放感が交じるとすれば、自己表現の場と手段を得たことがもたらしたのであらう（詳述する紙幅を持たないが、成仏の機縁はこの点に求められる）。

と「自己表現」を持った点に求められている。

この砧の段には「思ひを述ぶる便りぞと」「思ひを述ぶる夜すがらやな」と「思ひ」を述べる行為であることを述べている部分が多い。「思ひ」を心中に残すことが、「罪」を深くし、逆にそれを述べる行為が罪を消す働きをするこ  
(注20)  
 とについては、『平家物語』巻第十「維盛入水」に、維盛が滝口入道に向かい、

あはれ人の身に妻子といふ物をばもつまじかりける物かな。此世にて物をおもはするのみならず、後世菩提のさまたげとなりけるくちおしさよ。只今もおもひいづるぞや。かやうの事を心中にのこせば、罪ふかからんなるあひだ、懺悔する也。

という表現がある。また《恋重荷》(注21)の山科の莊司の悪霊も、「重荷といふも思ひなり」と自らを苦しめるものが「思ひ」であることを認識し、「思ひの煙の立ち別かれ」た後は、「跡弔はばその恨みは」、「つひには跡も消えぬべしや」と弔いを頼み、葉守りの神となることを約束する。シテの「思ひ」の整理は「成仏」に最も大切な要素である。相良氏・西村氏と重なるが、この妻も「思い」を「述べ」ていたことが、結果的に「懺悔」となって「罪」を軽くし、「菩提の種」すなわち成仏の機縁となったと考えて良いであらう。

妻は、夕霧とともに、砧を打つこととする。この部分を引用すると、

いざいざ砧打たんとて、馴れて臥すねの床のうへ、涙片敷く小筵に、思ひを述ぶる便りぞと、夕霧立ち寄り主従ともに、恨みの砧打つとかや

となる。この部分には、『和漢朗詠集』<sup>(注22)</sup> 卷上 十五夜の「織錦機中 已弁相思之字 擣衣砧上 俄添怨別之声」の当時の解釈が踏まえられている。田口氏（前掲）が既に指摘されているが、『和漢朗詠集永濟注』<sup>(注23)</sup> には、

下句ハ、蘇武、胡ノ国ニユキテ、ヒサシクカヘラサリシニ、ソノメ、秋コトニ衣ヲウチテ、カヘリキタラハ、キセムトマチシナリ。言口ハ、ツキノ、クマナクテラスヨ、モノヲ思フテ、衣ヲウテハ、キヌタノヲトモ、ウラミコエニキコウト云也。

とある。『永濟注』では、蘇武の妻は夫が帰ってきたらこれを着せようと考えている。《砧》の妻も、「破れて後はこの衣、たれか来ても訪ふべき、来て訪ふならばいつまでも、衣は裁ちも替へなん」とあるから、打った衣を暮れに帰る夫に着せようとして待っていると考えて良い。砧の音の怨み声は、夫と別れている恨みの音であるが、同時に、砧打ちの行為そのものは、夫の帰りを待つ準備でもある。

しかしながら、夕霧から知らされたのは、夫が「秋も帰らない」ということだった。この部分を引用すると、  
いかに申し候、殿はこの秋もおん下りあるまじきにて候

恨めしやせめては年の暮れをこそ、偽りながら待ちつるに、さてははやまことに変はり果て給ふぞや。

思はじと、思ふ心も弱るかな

となる。夕霧の一言は妻の死の直接の原因となっている。夕霧が夫の戻らない事を言わなければ、妻は死ななかったと仮定すると、この夕霧の存在は《砧》と言う劇の筋を決定する要因であると言える。夫が夕霧に約束したのは、「年の暮れ」である。複数の伝本で夕霧の告げた本文が「秋の暮れ」となっている以上、室町末期の伝本の享受者たちは、この時に夕霧は「秋の暮れ」と、主人の言葉を変えて妻に伝える人物として享受していることとなる。西村氏の論の特徴は、夫が当初妻に帰国するとした期限を「秋の暮れ」と考えておられる点にある。もし夫が妻に対して、遅くと

も三年目の秋に帰ると約束していたのならば、西村氏の説は充分成り立つ。しかしながら、詞章には「仮そめに上京」であつて、夫はすぐに帰国する予定だつた。「遅くとも三年目の秋の暮れに帰る」と言う部分が詞章に無い以上は、そのような約束があつたとは読み取りがたい。「仮そめ」の上京であつたはずが、「当年三年」になつてしまい、心配なので「この年の暮れ」に帰るとしたというワキの名乗りがある以上、これを基本に考えるのが筋である。田口説のように夕霧の作為があつたと考えるのが自然であらう。

妻は「さてははやまことに変はり果て給ふぞや」と、夫が自分を忘れてしまった（完全に都の女性に心を移した）と考える。そしてその思いから病氣となつて死んでしまう。この部分は、

声も枯れ野の虫の音の、乱るる草の花心、風狂じたるこちして、病の床に伏し沈み、終に空しくなりにけり、  
終に空しくなりにけり。

となる。蘇武の妻とは異なり、砧を打つても夫へ心は通じず、その帰りを待ち受けることは出来なかつた。

#### 四 悔いの八千度百夜草

後場は夫の弔いから始まる。夫の言葉は

無慚やな 三年過ぎぬることを恨み、引き別かれにし爪琴の、終の別かれとなりけるぞや。

先立たぬ、悔いの八千度百夜草、悔いの八千度百夜草の、蔭よりもふたたび、帰り来る道と聞くからに、梓の弓の末筈に、言葉を交はす哀れさよ、言葉を交はす哀れさよ。

というものである。夫は、「三年過ぎぬることを恨み」と三年間帰国しなかつたことが、妻の死の原因と意識してい

る。そして、「先立たぬ、悔いの八千度百夜草」と非常に後悔している。この夫が後悔しているということは、妻の成仏という結論に対して、非常に重要なことだろう。喜多流は、冒頭で夫が登場せず、夕霧が名乗る。このため、ここで夫が名乗る。この詞章は、

これは芦屋の某にて候、われ訴訟のこと候ひて、三年に余り在京仕りこの頃罷り下り候ふところに、妻にて候ふもの空しくなりて候ふほどに、法事をなさばやと存じ候

というものである。喜多流では、妻の病死ということを述べているが、夫に過失があるようにはされていない。待謡も

先立たぬ、悔いの八千度百夜草、悔いの八千度百夜草の、蔭よりもふた度、歸りてかひもなき身ぞと。念ひの珠の数々に、かの跡弔ふぞ有難き、かの跡弔ふぞ有難き。

となっている。「亡霊がこの世に帰っても仕方がないので、極楽に行くよう弔うのは有り難いことだ」と訳すことができるだろう。喜多流では、夫は在京していることを後悔はしているものの、妻の死について夫にも責められる点があるという要素は完全に抜けていると考えて良い。

梓の弓に引かれて現れた妻は、夫への妄執の罪で地獄に堕ちていた。そして、その心情を

羊の歩み隙の駒、羊の歩み隙の駒、移り行くなる六つの道の、因果の小事の、火宅の門を出でざれば、巡り巡れども、生き死にの海は離るまじや、あぢきな憂き世や。恨みは葛の葉の、恨みは葛の葉の、歸りかねて、執心の面影の、恥づかしや思ひ夫の、二世と契りてもなほ、末の松山千代までと、掛けし頼みは徒波の、あら由なや虚言や、そもかかる人の心か。

と述べる。「末の松山」の表現は、当然『古今和歌集』<sup>(注24)</sup>の「きみをおきてあだし心をわが持たば末の松山波もこえな

ん」を踏まえたものであり、浮気をしないという約束があり、妻は夫がそれを反故にしたと考えていることを前提としている。

鳥てふ、大嘘鳥も心して、現し人とはたれか言ふ、草木も時を知り、鳥獸も心ありや、げにまこと譬へつる、蘇武は旅雁に文を付け、萬里の南国に至りしも、契りの深き志し、浅からざりしゆゑぞかし、君いかなれば旅枕、夜寒の衣現つとも、夢ともせめてなど、思ひ知らずや恨めしや。

この部分は、蘇武が旅雁に文をつけて飛ばし、その雁が故郷に文を届けた故事を踏まえている。そして、蘇武の「契りの深き志し」があつたからであると夫をなじっている。妻は蘇武の妻と同様に砧を打ち、「風の便り」にのせて夫のもとにその音を届けようとした。しかしその音は夫のもとに届かなかつた。また、夫も雁に手紙をつけて送るなどというような、妻に対する思いやりはなかつた。「現し人」とは思われない「大嘘」をつく人間という表現からも、妻が非難しているのは、単にその期間都から帰つてこなかつたという事のみではない。妻は夫の「心」が「変わり果て」、都の女性に心を移したと考えている。妻からみて夫は不実な男であり、夫の「悔いの八千度」という表現は、仮に訴訟が原因での在京であつたとしても、都に妻がいるという実態があつたと読む事が出来る。

妻が夫を激しくなじつた後、妻が法華經の読誦によつて成仏したと述べられる。この部分は

法華読誦の力にて、法華読誦の力にて、幽靈正に成仏の、道明らかににけり、これも思へば仮そめに、打ち砧の声のうち、開くる法の花心、菩提の種となりにけり、菩提の種となりにけり。

というものである。この成仏は曲の展開としてはいかにも唐突である。しかしながら、この曲が唐突な終わり方をしながら、この形が当時の観客に納得されているのは、この形の物語がすでに存在し、この《砧》の曲自体がそのパターンの中に納まるからに他ならない。その物語のパターンは、やはり法華經説話に求められることになるだろう。

## 五 家族を救いに戻る「仏」——還来穢国度人天——

「法華説誦」は、夫が妻を弔うものである。妻は、自分が「二世まで」と契った夫の弔いによって成仏した。堂本氏は、妻と夫の間の愛情が回復したためとされる。しかしながら、中世的な理解で言えば、「恩愛の絆」の回復では、成仏には至らないと考えるのが自然である。では、この夫婦は、このあとどのようなことになるか、《砧》では想定しているのだろうか。

妻が、夫も責めを負うべき事柄で地獄に堕ち、夫の弔いをうけるものに、『宇治拾遺物語』<sup>(注25)</sup>巻六ノ一の「広貴、依妻訴、炎魔宮へ被召事」がある。藤原広貴が、死んで閻魔の庁に引き出され、閻魔王に妻の訴えによって、そこに召されたことを知る。この妻は、産で亡くなっていた。王が妻の訴えを広貴に告げる部分を引用すると、

妻の訴へ申心は、「われ、男に具して、ともに罪をつくりて、しかも、かれが子を産そこなひて、死して地獄に落て、かゝるたへがたき苦をうけ候へども、いさ、かも我後世をも弔ひ候はず。されば我一人、苦をうけ候ふべきやうなし。広貴を諸共に召して、おなじやうにこそ苦をうけ候はめ」と申によりて召したるなり」との給へば、

となる。妻は、広貴とともに罪を作り、広貴の子の産で亡くなった。罪は二人で負うべきなのに、妻のみが地獄で責められるのは理不尽であるという内容である。これに対して広貴は、<sup>(注26)</sup>

広貴が申やう、「此うたへ申事、尤ことはりに候。大やけわたくし、世をいとなみ候あひだ、思ながら、後世をば弔ひ候はで、月日はかなく過候ふ也。たゞし、今にをき候ては、ともに召されて、苦をうけ候とも、かれがために苦のたすかるべきに候はず。されば、このたびはいとまを給はりて、娑婆に罷帰て、妻のために、よろ

づをすて、仏經を書供養して、弔ひ候はん」と申せば、

と、尤もではあるが、今自分が地獄に墮ちても、妻が苦しみから逃れることは出来ないで、妻のために經を書写して供養するから今回は娑婆に戻すよう頼んだ。広貴の言った内容を王が妻に告げると、妻が「実々、經仏をだに書供養せんと申候はば、とくゆるし給へ」と広貴を許すよう言ったので、広貴は娑婆に帰ることとなった。帰る前に、王がどのような方か知りたいと思つて尋ねて地蔵菩薩と知る。広貴は、

「さは、炎魔王と申は地蔵にこそおはしませしけれ。此菩薩に仕らば地獄の苦をばまぬかるべきにこそあんめれ」と思ふ程に、三日といふに生歸て、そののち、妻のために仏經書供養してけりとぞ。

と、供養したという。このことによつて、妻が成仏したか否かについては書かれていないが、少なくとも妻が地獄と離れたであろうと思わせる書き方であると言える。

《砧》の妻は「成仏の道が明らか」になった。夫の弔いにより、やがては成仏する。それでは、「成仏」して「仏」となった妻は、夫をどうするのか。これは『平家物語』<sup>(注28)</sup>巻第十「維盛入水」の滝口入道の言葉が参考になるだろう。

滝口入道は、維盛が入水に臨んで、なお妻子が気がかりだと述べたとき、

たかきもいやしきも、恩愛の道はちからおよばぬ事也。なかにも夫妻は一夜の枕をならぶるも、五百生の宿縁と申候へば、先世の契あさからず。

と、夫婦の縁が深いことを述べる。そして入水しても、

成仏得脱してさとりをひらき給ひなば、娑婆の故郷にたちかへ<sup>(注29)</sup>(ツ)て妻子を道びき給はん事、還来穢国度人天、

すこしも疑あるべからず

と妻子を極楽に導くべく戻つてくると言う。妻は夫を慕っていた。生前は妻の心が届く事はなかったが、夫が弔う事



によつて成仏した。で、あるならば、この夫は妻が成つた仏の来迎によつて成仏する運命にあると考えるのが自然だろう。そしてここに、この夫婦の「二世の契」は完成することとなる。

## 六 まとめ

《砧》の物語は、生前はしつくり行かなかつた夫婦が、片方の弔いによつて、最後にはともに成仏するという説話のパターンを踏襲している。妻が夫に「徒波」があつたとする部分や、夫を「現し人」ではないという部分からは、少なくとも妻から見て夫が「誠実」な人物でなかつたことは確実である。夫は妻の生前、妻に冷たくしているという意識はなかつたかも知れない。しかしながら、京都には現地妻がおり、故郷の妻から見れば、都の夫は仕事を一途にしているというよりも、都の生活を樂しんでいるように見えている。夫を「善意の人」とした場合には、妻の夫への「恨み」は妻の誤解に基づく事になる。それでも夫を「善意の人」とするならば、それはむしろ「妻への配慮が欠けた人」と言う方が正しいだろう。夕霧についても、室町末期の伝本では夕霧が夫の伝言をそのままの形で伝えていないことが確かである。妻の死の原因となる夫が帰らないという言葉は、田口氏の言われるように、夕霧の作為という意味が大きくなるだろう。

《砧》は「現在能」でも「夢幻能」でもない。分類としては「準夢幻能」であろう。後半に妻の亡霊が現れるのだから、その点、夢幻能の構成要素は含んでいる。しかしながら、通常の夢幻能と異なり、ワキは旅僧ではなく夫であり、しかも前ジテは妻の亡霊ではなく、生きて夫の帰りを待つ妻そのものである。前場のみを見れば現在能であるとも言ふことが出来る。このような構成の能の場合、通常の夢幻能と異なり、現在能と同様のドラマ的な演出が強く

られるのではなからうか。同じ構成の能に《恋重荷》がある。この曲のツレの女御も老人の自らへの恋を知って、<sup>(注30)</sup>「恋は上下を分かぬ慣らひ、かなはぬゆゑに恋といへり、かやうの者の持つ荷の候ふをかの者に持たせよと仰せられ候」と老人の恋を叶える気持ちは全くないのにも関わらず、老人に重い（＝思い）「重荷」を持たせて死の原因を作るといった劇的な性格を持たされている。《恋重荷》は老人がシテであるが、その筋立てはシテ中心主義からはずれる部分がある。《砧》も、ワキの夫が妻以外の女性に心を移しているとか、ツレの夕霧が夫の愛妾の一人であり、妻が一度に夫を恋慕していることに對して悪意を抱くなどのドラマ的な性格を持っていたとしても、さほど不自然とは思われないのである。

《砧》の上演が中絶し、再び行われたときには、夫も他の女性に心を移しており、夕霧も妻に對して作為を持つといった劇的な人物造形は、能において表現する内容である意識されなくなっていたと考えられる。観世流が夕霧の「この秋もおん下りあるまじき」の詞章を「この年の暮れにも御下りあるまじき」に変更したことや、冒頭の夫と夕霧の問答を省略する喜多流の演出は、夫・夕霧ともに「善意の人」として処理するものと考えて良い。夕霧の役割も単なる使者であり、妻に同情する者として造形されている。江戸初期の改訂は、この曲の主題をシテの夫への怨慕に絞る方向に働いていると言つて良い。但しこれは故意に行つた改訂と言うよりは、ツレやワキに劇を左右する程の性格を持たせる能が少なかったので、もとの劇的な要素に気づかずに行つたという種類の改訂であろう。

## 注

- 1 『謡曲集 上』 横道萬里雄 表章校注 日本古典文学大系40 岩波書店 昭和三五年二月発行 三三二―三三九頁
- 2 「砧」の能の中絶と再興 表章 『観世』 四六卷一〇号 昭和五四年一〇月発行 一九―二四頁参照

《砧》試解

- 3 同注2 二四頁
- 4 『作品研究「砧」』 八寫正治 「観世」 四六卷九号 昭和五四年九月発行 一一頁
- 5 『世阿弥の能』 堂本正樹 新潮社 平成九年七月発行 一七一頁
- 6 同注5 一七五頁
- 7 『能・狂言研究—中世文芸論考—』 田口和夫 三弥井書店 平成九年五月発行 一九二頁
- 8 同注7 一九四頁
- 9 『砧』論の前提』 西村聡 「金剛」 一五九号(第五五卷第三号) 平成一二年九月発行 一〇頁
- 10 同注9 一〇頁
- 11 同注9 一一頁
- 12 同注9 一一頁
- 13 『謡曲集 上』 伊藤正義校注 新潮日本古典集成(第五七回) 昭和五八年三月発行 新潮社 三二六頁
- 14 『能「砧」の修辭と構想—故事引用の方法及び女のドラマとしての視点—』 稲田秀雄 「同志社国文学」 第二五号 昭和五九年  
一二月発行 一一—四頁
- 15 『砧』小記—蘇武妻のこと』 黒田彰 「能楽タイムズ」 四〇六号 昭和六一年一月発行 一一頁
- 16 『蘇武が旅寝』 徳江元正 第一三回丹波夜能 平成元年九月  
同注7 一九五—一九九頁
- 17 『世阿弥の宇宙』 相良亨 ぺりかん社 平成二年五月発行 一三一頁
- 18 同注9 一〇頁
- 19 『平家物語 下』 高木市之助 小澤正夫 渥美かをる 金田一春彦校注 日本古典文学大系33 岩波書店 昭和三五年一一月発  
行 二八一頁
- 20 同注1 三三〇頁
- 21 『和漢朗詠集 梁塵秘抄』 川口久雄 志田延義校注 日本古典文学大系73 岩波書店 昭和四〇年一月発行 一〇八頁
- 22 『和漢朗詠集古注釈集成 第三卷』 伊藤正義 黒田彰編著 大学堂書店 平成元年一月発行 八一頁
- 23 『和漢朗詠集古注釈集成 第三卷』 伊藤正義 黒田彰編著 大学堂書店 平成元年一月発行 八一頁

- 24 『古今和歌集』 小島憲之 新井栄蔵校注 新日本古典文学大系5 岩波書店 平成元年二月発行 三三一頁 巻第二〇 東歌一〇九三番
- 25 『宇治拾遺物語 古本説話集』 三木紀人 浅見和彦 中村義雄 小内一明校注 新日本古典文学大系42 岩波書店 平成二年一月発行 一五二―一五四頁
- 26 同注25 一五三頁
- 27 同注25 一五四頁
- 28 同注20 二八二頁
- 29 同注20 二八四頁
- 30 同注1 三二五頁

付記 本稿は、平成一二年度松下国際財団研究助成、平成一二年度堀情報科学振興財団研究助成、平成一二年度科学研究費基盤研究(C)による成果の一部となります。記して感謝申し上げます。